

小峰城よもやま話

第七話
丹羽長重
一石二鳥の大工事

白河の中心市街地では、小峰城の石垣はもちろん、まちなかを走る旧奥州街道や短冊型の地割など、今でも城下町の名残を見ることが出来ます。

現在まで続く城下の基礎を築いたのが、初代白河藩主・丹羽長重です。

長重は、石垣を多用した城へと小峰城を改修しましたが、ほかに多くの整備を行いました。

大きな整備のひとつが阿武隈川の付け替えです。長重は、小峰城の北西を蛇行しながら流れていた川を北側に付け替えました。なぜ長重はこのような大規模な工事を行ったのでしょうか。

ひとつには、小峰城に東北の外様大名に備えた「奥州の押さえ」としての役割が求められたことがあります。城の北側の防御を重視するため、川の流れを変え、天然の外堀としての機能を持たせました。

一方で、小峰城が白河藩主の居城となったために生じた屋敷地不足も課題になっていたと考えられます。大名は、その石高に見合った武士を召し抱える必要がありました。改修前には、石高10万石に必要な家臣を住まわせるだけの敷地がなかったと考えられます。

長重は、川の付け替えにより、

新たに利用できるようになった土地に武家屋敷を整備し、屋敷地不足も解消しようとした。この新しい町には、改易された会津領主蒲生家の元家臣から取り立てた者を多く住まわせたことから「会津町」の名がつけられたと言われています。

長重は、藩主になってすぐこの工事に着手しています。立藩直後に生じていた課題を一度に解決できる一石二鳥の取り組みだったからこそ、はじめにこの事業を行ったのではないのでしょうか。



▲奥州白河城絵図(部分)(国立公文書館蔵)

問文化財課 ☎272310

※9月号13ページ・小峰城よもやま話に誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

(正) (1601) (1627)
(誤) (1601) (1624)

白河、あの頃と今

今月のテーマ「白河バラ園」

Vol.2



市内の様子や行事などを写した古写真の中から、テーマに沿った1枚を紹介し、現在の様子と比較します。タイムスリップ気分を味わいながら、白河の魅力を再発見しませんか？ 本庁舎秘書広報課 内2171

【昭和35年～38年の様子】



昭和35年6月、小峰城の敷地内にバラ園が開園しました。植えられて間もないバラたちの様子から、この写真が開園当時頃に撮られたものと推測できます。お城の石垣とバラの花。珍しい組み合わせです。

【現在の様子】

バラ園は閉園し、現在は小峰城が整備中のため、跡地には入れません。植えられていたバラたちはどこへ。



子ども広場の階段を登ると...



9月中旬撮影

実は、一部がコミネスの敷地内に移植されています。秋はバラがきれいな季節です。ぜひ一度ご覧ください。

ラウンジ
お知らせ
りげらん
シリーズ
子育て
保健
くらしの
情報館
手話
高齢者サロン
休日当番医・
無料相談ほか
市長の
手控え帖